

外部評価委員長による令和3年度博物館事業点検評価の外部評価総括

令和3年度の神戸市立博物館が掲げる「博物館使命の四大要素」、すなわち「歴史と文化の継承と研究」、「歴史と文化への窓口」、「人々とともに歩む」、「やさしさと安心の確保」についての評価は、自己評価ではすべてがB、外部評価ではAあるいはBであった。

令和3年度は、前年に引き続き新型コロナウイルスの流行拡大にともない、行動制限がなされるなか、博物館の活動を行うことになった。多くの人々に来館をしていただくための施設としては、様々な工夫を施しながらの活動となった。特別展では、「東山魁夷 唐招提寺御影堂障壁画展」・「伊能図上呈200年記念特別展 伊能忠敬」・「大英博物館ミイラ展 古代エジプト 6つの物語」が開催された。会期の変更などを余儀なくされた展覧会があったものの、多くの観覧者に来ていただいたことは喜ばしい。

「歴史と文化の継承と研究」については、資料の受け入れ、保存、補修、展覧会準備、研究紀要執筆など研究成果の発表等が順調に行われた。コロナ禍のもと学芸員のたゆみない活動について評価する意見が多かった。今後は、博物館資料を広く紹介し利用してもらうためのデジタルアーカイブズの計画的な充実が望まれる。

「歴史と文化への窓口」については、前述の特別展が開催された。東山魁夷展では会期中の中断、会期延長などがあったが、こうした柔軟な対応は評価される。伊能忠敬展は、神戸市博が全国有数の古地図コレクションを持つことから、当館にとってふさわしい展覧会であった。これに海外展を加えバランスのとれた内容で、市民の関心を呼ぶものであることが評価された。関連講座については、多数の応募があったにもかかわらず、社会情勢上、定員制限をしなければならなかったことは残念である。講座のオンラインでの対応などが今後の課題である。ただ、伊能忠敬展では香取市文化会館とのオンライン講座を試行したことは評価できる。

「人々とともに歩む」については、普及事業を遂行するため感染拡大防止の様々な工夫のもと事業が行われたことは評価される。学校来館などは、以前のような方式ではなかなか難しいものであるが、連携授業は学外に出られない学校側において大いに歓迎されているとの意見があった。

「やさしさと安心の確保」については、建物の老朽化にともなう継続的な対応が求められた。予算の確保はなかなか難しいものの、来館者の安全と収蔵資料の保全是重要な課題であり、関係部局の理解を得ての改善が望まれる。

令和3年も博物館にとっては厳しい状況であったが、博物館としての事業を継続して行えたことは評価される。コロナウイルスへの対応の仕方も次第に変化している時期であり、実物をじっくり鑑賞できる博物館の本来の機能が発揮されることを期待したい。

外部評価を行った委員

(令和4年度 博物館協議会委員)

[協議会会長(外部評価委員長)]

原田 正俊 関西大学文学部教授:日本中世史

[協議会副会長]

黒田 千晴 神戸大学大学教育推進機構グローバル教育センター准教授:比較国際教育

[協議会委員]

中井 伸夫 神戸市小学校教育実践研修社会科グループ担当課長(東町小学校長)

篠原 亮 神戸市中学校教育実践研修社会科グループ担当課長(湊翔楠中学校長)

井上 優 特定非営利活動法人こうべユースネット理事(財務担当)

高尾 ひろ子 神戸市婦人団体協議会理事

金井 茜 神戸市ネットモニター

柴田 健太郎 神戸労働者福祉協議会副会長(神戸市教職員組合執行委員長)

戸田 清子 奈良県立大学地域創造学部教授:日本経済史

馬淵 美帆 実践女子大学文学部教授:日本近世絵画

禰亘田 佳男 大阪府立弥生文化博物館館長:考古

大河内 智之 奈良大学文学部准教授:日本美術史

松岡 辰弥 旧居留地連絡協議会会長

歴史と文化の継承と研究

自己評価詳細

令和3年度については、コロナ禍の最中でもあったが、調査研究を工夫しながら、資料の受入、保存、補修、展覧会の準備、研究成果の発信など学芸分野の根幹の業務に対応できている点は評価してよいだろう。博物館法の改正、施行(令和5年4月1日)にともなって、デジタルアーカイブの充実が努力目標となることから、これらにも注力する必要があると考えられる。令和4年度については、この点も含めて検討していくことが望まれよう。

外部評価委員コメント

コロナ禍にもかかわらず、様々な業務に対応できていたことは評価できる。

【資料受入】コロナ禍においても、収集方針や活用計画に基づき、活用が見込める資料・作品を購入できたことは評価できます。寄贈では神戸の歴史・美術・古地図に関する資料を拡充でき、特に、「川口氏旧蔵資料」については、受入後の速やかな公開が実現できたことは高く評価できます。

【資料保存】前年度実施した館内に虫菌類が生息しにくい環境づくりが、大きな成果となったと思います。虫類0・菌類0の環境を目指すため、館内の関係者全員で環境の改善に努められたことは高く評価できます。今後もぜひ継続していただきたいと思います。

【資料補修】新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、当初計画していた資料修理が工期不足となったが臨機に対応することで、当初計画外の軽微な補修等を追加で実施できたことは評価できます。

【調査研究】

○ 調査研究計画:次年度以降の展覧会に向けての事前調査が実施できたこと、自主企画特別展のスケジュール案を作成されたことは評価できます。

○ 館外資料調査:全分野において、各学芸員の担当分野に関する資料調査が実施できたことは評価できます。

○ 研究成果発信:執筆・講演・発表について、前年を超える件数を実施できたことは高く評価できます。

○ 館蔵品目録・研究紀要・年報:紀要目録は発行までの過程において、これまでの事務処理に拘らず改善されたことは評価できます。年報については、前号(2年度)が未公開となっているため、本年度号が完成しているが公開できないとのこと、早急に公開し改善することが必要です。

自己評価では「B」となっているがコロナの影響を受けつつも努力されてきたことが伝わってくる。

「資料保存」近年課題となっていた害虫発生に関して、対策をし、さらにその効果を確認できたという事で、環境作りが着々と進んでいる事を実感できた。様々な要因から、今後も引き続き課題も増えると思うが、適切な対策を期待しています。

デジタルアーカイブの充実に関しては、今後計画を立てて遂行していくことが必要。学芸員の研究成果を生かした図録執筆が進んだことは評価される。

博物館業務の根幹にかかわる資料収集・資料補修・資料整理、また学芸員の研鑽の場である研究紀要等の刊行が地道に進められていることは重要なことで、今後も多くの学芸員が執筆していただきたいと思います。とくに、OBにも執筆の道を開かれたというのは、研究紀要の内容が幅広くなるとともに、人的交流が継続することにもなるので、意義深いものと考えます。

資料受入のうち、寄託の実績がなかったことについては、館としての受け入れ方針に基づくものであれば問題はない。ある程度能動的に収集が可能な手法でもあるので、収蔵資料中で手薄な分野があるようであれば今後も活用を検討されたい。

展示室内の温湿度コントロールの不調について、結露等による資料の汚損などの深刻な被害が発生した場合に対外的対応(市民・寄託者等への)が必要となる可能性もあり、憂慮される。修繕を計画するためにも原因究明が必須となるので、主管課等とも問題の深刻度を共有して対応されたい。

資料補修に関し、単年度事業のなかで工期を十分に確保するために工夫されたことは、臨機応変の柔軟な対応として評価すべき。一方で、複数年度にまたがる修理についても、修理費の外部資金獲得等にもつながりうる問題であり、行政的な整合性を取る方法について、検討は行うべきものと思料する。

館紀要での調査研究・資料紹介、外部媒体での論文発表等の活動について、学芸員としての向上心と、地域研究者としての責任感の現れといえ、高く評価するべきもの。一方で、個人のモチベーションに依存するのではなく、組織として研究のインセンティブが働く体制作りも検討されたい(研究機関認定と科学研究費補助金の獲得、外部資金獲得の組織的支援など)。

・空調環境の不安定な状況については、悪化することもありうるため、早急に対応策を講じる事が重要と考える。

・デジタルアーカイブの充実については、SNSとの連携や多くの方々の目にふれる非常に有効なものと考えるので、取組の促進をお願いしたい。

外部評価コメントつき

資料受け入れ

資料購入については概ね、展覧会、並びに調査研究に役立つであろう資料・作品を入手することができたと思う。寄贈された神戸の歴史・美術・古地図に関しては「神戸の歴史」をより深く市民に周知し理解と関心を深めてもらうと言う点で有り難く思う。また、「川口氏旧蔵資料」については、コレクション展示室「川口コレクション受贈記念江戸時代の旅と名所」、令和4年2月5日（土）～ 令和4年3月27日（日））が実現できたことは意義深い。

また学芸員の方々が、「自らの目で購入候補を探し出し、館蔵品に加えること」については毎回課題となっているが、新型コロナウイルス感染症拡大が未だ続いている状況での活動は困難を極めたと考える。今後はコロナ感染状況を見据えながらの購入活動と同時に、受け入れルール策定に向けても、前向きに検討を進めていくことが必要であろう。

資料保存

これまで課題にあがっていた収蔵庫内における害虫発生に関して、除菌・防虫対策の効果があつたことは評価できる。大切な所蔵品・資料を良好な状態で保存していくためにも、継続的・定期的な防菌防除作業の実施が望まれる。

資料補修

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で資料の現状調査のための日程調整が困難となったことは残念ではあるが、やむを得ない措置と思う。そのような中でもその後、日本地図屏風の応急修理や陳賢「羅漢図」などの復旧ができたことは評価できる。計画どおりの年度内執行が困難であるなか、各資料の担当者が事前準備を進め、次の候補を臨機応変に選定することができたことは大いに評価できるし学芸員の方々の苦勞がしのばれる。

調査研究

展覧会に関する調査に関しては、伊能忠敬展、川崎美術館展に関する事前調査、明治の写真展(令和6年以降開催予定)、六甲の歴史と文化展に関する事前調査など、多岐にわたる調査研究が進展していることは大変評価できる。調査研究を進展・深化されることは、博物館にとって重要な使命であるといえる。今後開催予定の展覧会にかかる負担金、調査費の予算要求については、可能な限り、要求が認められことが望ましいし、十分な条件下で調査・研究を行えることが、学芸員の方々のモチベーション維持にも繋がると考えられる。今後も新型コロナウイルス感染症拡大によって、調査を中止することもやむを得ないと思う。状況をよく見極めたいうえて、くれぐれも安全な調査研究を行って頂きたい。

収蔵品データベース

考古学については、赤松コレクションに関して資料の接合、実測、写真撮影を実施することにより、データベース登録と更新ができ、その成果を、「失われた古墳と救われた資料～遺跡保護運動の足跡～」に反映できたことは意義深い。歴史に関しては、神戸の近代景観写真約100点がいずれデータベース化されると思うので期待したい。また工芸については、びいどろ資料コレクションの未整理作品約200点の写真撮影を実施、データベース登録を行ったことは大いに評価できる。古地図に関しても新規購入資料4件のデータベース登録と公開活用に向けた準備ができたことは評価できよう。館蔵品データベースをHP上で公開することは、長引くコロナ禍のなか、研究者、学生、一般市民の方々にとって大変役立つことではないだろうか。引き続き、より充実したデータベースの構築が望まれる。

「資料受入」は、多くの点数からなる資料の購入・寄贈を果たし、寄贈資料の速やかな公開まで行っておられ評価できる。「調査研究」は、個人の研究テーマに関わる調査も積極的に行っておられ、学芸員の専門性への高い意識がうかがえる上、研究成果発信数が昨年度より増えており高く評価できる。

資料受入、資料保存については、当初設定されていた課題・目標がほぼ全て達成されており、予定した業務はほぼ滞りなく実施されたことが確認できる。資料の保存に関して、虫類の発生を抑えることに成功したとのことで安堵した。貴重な館蔵品を虫害から守ることを最優先に対策を継続していただきたい。

資料の補修については、資料担当者の事前準備が整っていたことにより、臨機応変に当初予定を変更して実施しており評価できる。

調査研究については、各担当者の専門分野に深く踏み込んだ研究が実施されており、個人の研究テーマに関する学術誌・学会誌への投稿や学会、研究会での発表が充実している点が高く評価できる。また、紀要に館蔵品や神戸の歴史・文化に関する調査研究の成果を発表している点や、神戸の歴史や館蔵品に関する講演や講座が実施されている点も市立博物館としての使命に合致するもので評価できる。事務作業が繁忙化する中で時間を確保するのは困難であるとは思いますが、調査研究は学芸員本来の主要な業務であると思われるため、研究日や研究時間を制度として確保するなどの工夫が必要だと考える（※既に対応済みであれば、ご放念ください。）

博物館の紀要の内容の目次を「全国遺跡報告総覧」に掲載し、連動したCiNii Researchでの検索が可能になったとのことだが、紀要に掲載された論文等の電子化(PDF)を併せて進めることにより、研究成果をより広く発表できるようになるのではないかと考える。今後の課題としてご検討いただきたい。

歴史と文化への窓口

自己評価詳細

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、東山魁夷展では一部中断を余儀なくされたが、臨時に会期を延長するなどの対応ができたことは来館者にとっては、プラスの要因であったらう。また伊能忠敬展では香取市文化会館とのオンライン講座を実施したことは感染症対策の一つの具体的対応として評価してよいだろう。これに対して、伊能展や大英展では定員を少なくしての講座等になったため多数の受講申し込みに対応できなかった点は今後の工夫を迫られた出来事でもあった。新たな試みとして広報面でInstagramを開設したが、次年度以降の課題としては、コレクション展示室の入館者増につながる効果的なSNS発信が望まれる。

外部評価委員コメント

特別展

- ・3本とも一般市民にとって興味関心の高い内容を企画・実施されたことが評価できます。
- ・展示以外の取り組みをされたことも評価できます。

・新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、定員制限を実施したことはやむを得ないことだと考える。今後は、新たな試みとして広報面でInstagramを開設したように、来館者、入館者増につながるような取り組みに期待したい。特に、若者層や歴女等に代表されるような女性へのアプローチも可能性としてあるのではないだろうか。

・SNS等の活用を今後、さらに期待したい。

・伊能忠敬三角スケールのように特別展の内容とマッチした、神戸市立博物館でしか手に入れることができないレアなグッズを開発・製作したことは評価できる。今後は、SNS等もさらに活用して、購買状況だけでなく入館者数増にもつなげて欲しい。

【常設展】新型コロナウイルス感染症の影響があるなか、神戸の歴史展示・コレクション展示を、概ね計画どおりに展示が実現できており、適宜に資料の展示替えも行い、館蔵品等の魅力を伝える良い機会となったことは評価できます。

【特別展】コロナ禍の不安があるなか、東山魁夷展・伊能忠敬展・大英博物館展を無事に開催されましたことは、多くのご苦勞あったことと思います。三つの特別展では分かり易い展示と案内掲示で、入館者の多くの方は新たな知識を習得することが出来たと思います。

【広報】従来の紙による広報に、HP・SNS等を活用した効果的な広報が実施できたことは高く評価できます。博物館だよりは手頃な大きさの見開き8ページで、色合やページ構成も良く、見たい読みたいと思える広報誌となっています。特に、カレンダーを展覧会スケジュールとして取り入れたことは、展示替え等も表示されており博物館への興味が大いに膨れ上がったことと思います。

今回「よみがえる川崎美術館」に足を運ばせてもらったが、とても感動した。ひとつひとつの作品がもつ魅力も感じたが、展示の仕方にストーリー性があり、最後の作品の前では長い時間足が止まった。

こういう企画展はもちろん、普段からもっと来館者があってもいいように思う。高校生以下が無料であること、SNSの利用はその世代が多いことを考えると、まだまだ可能性は広がりそうな気がする。

コロナ禍の最中に、ミイラ展(海外展)を開催されたことは、展示を観覧しなかった方々も様々な媒体によって本企画のことは知ったでしょうから、コロナ禍の先に「元の生活」が近くなってきたことを文化・文化財の分野から発信することになったという点で、この特別展の意義は非常に大きいものがあったと思います。

この展示は私も行かせていただきましたが多くの方が来られていました。展示内容もすばらしいものがありました。そして、写真撮影可とされた部分もあったことも、大変良かったと思います。海外では写真撮影可が普通なのに、日本ではなかなか「ハードル」が高いという実情があり、その理由も承知はしていますが、少しずつでも撮影可となるよう、努力を続けていっていただきたいと思います。

企画展の実施ができなかった、つまりインド展をどうしても開催せざるを得ない事情が発生したようですが、学芸員の士気に影響したようですので、改善策等が検討されたのかが気になる点です。

平成3年度、私は特別利用をさせていただきましたが、非常に丁寧な対応をしていただき、感謝申し上げますと思います。

広い意味での「広報」になると思うのですが、特別展・企画展などには市長や教育長など市の幹部や議員などには声をかけているのでしょうか。そうした方々へのアプローチがおこなわれているのであれば、なお一層やっていただきたいですし、それが無いのであれば、「これは」という特別展には来ていただける工夫をていただきたいと思います。

常設展のうちコレクション展示について、分野ごとに年間5回の展示替えを行っており、コレクションを活用した市民への鑑賞・学習機会の提供という点では一定の責務は果たされている。コレクション展示室入館者の大幅な減少については顕著な理由があるものと思われるので(別途入場料徴収も一要因)、館全体で課題を共有し、解決を図るよい機会とされたい。

企画展について、現状の展覧会構成上、地域に根ざした内容の展覧会は多くこの枠組みで行わざるを得ない状況と推察する。博物館の存在意義や基本的性格にも「地域の共有財産を掘り起こし」「神戸の文化にこれまでにない魅力をつけ加える」ことを大きく掲げている以上、興行や入館料収入を優先してその枠組みを放棄することは、市民に提示した博物館の役割を反故にすることともなるので、組織内で事業の整合がつくよう、十分な調整を図られたい。さらにいえば、特別展の枠組みで、地域の歴史と文化、美術の魅力を紹介し、市民が情報を共有化のための図録も制作するような展覧会を増やすことも必要と思われる。

展覧会広報のうち、SNS利用のものについては、展覧会担当者の負担を軽減できるよう、管理運営のスタッフ等も含め複数人の対応にて臨む必要があるのではと思われる。

- ・特別展については、3つとも趣のちがうもので、いいラインナップだったと思う。
- ・令和2年に続き、コロナ禍での開催となり、ご苦勞も多かったと思うが、よく対応されていた。
- ・夜間開館や休館日の案内をツイッターにて発信されているようだが、他のSNSにも投稿してはいいかが。

外部評価コメントつづき

図録販売について通販を行い、販売部数を増やしたことは評価される。継続して取り組んでいただきたい。

「特別展」3つの特別展のアンケート満足度を比較した時に、「伊能忠敬展」の中にある「展示のみやすさ」が65.0という数字はかなり低いと感じる。足を運んでいる方からすると、人的要因（混み具合等）でなく展示自体の方法に課題があったとすれば、会期前の設営時には「見やすさ」に関して、問題にはあがらなかったのか、お伺いしてみたいです。「広報」Twitter、Instagram、それぞれの特徴を生かした投稿内容を期待します。文書の中の入力ミス（ハッシュタグ）が多い点。また、せっかくアップしてもフォロワー以外には広がりにくい仕様になっておりもったいないと感じます。ターゲットの年齢層を増やすのであれば、必須課題だと思います。

常設展については、コロナ禍のなかではあるが、神戸の歴史展示、コレクション展示ともに、所定の展示を行うことができたことは評価できる。今後も、交流を中心とした神戸の歴史を伝えることのできる展示を行うとともに、地域の「知の拠点」として、大人から子どもまで、歴史や文化に親しみ、関心をもつことのできる展示空間を構築することが大切だと考える。貴重な展示物が多数あるため、展示室内が不安定な湿度状況であることは危惧されるが、加湿器・除湿器などの活用、日々の観察などで引き続き、改善を図って頂きたい。近世のコーナーについて、湿度変化の影響を受けにくい資料の展示に変更したことは安心材料の一つであるが、展示物に直接、重大な影響を与える、こうした湿度の問題に関しては今後も十分な観察、改善が必要であろう。先の見えないコロナ禍のなか、東山魁夷展、伊能忠敬展、大英博物館展と特別展3本を安全に開催できた点は大いに評価できる。東山魁夷展、大英博物館展において、アンケートの満足度が目標を大きく上回り、感謝の言葉などが多く寄せられたことは職員の方々のモチベーションを高く保つためにも良かったと思う。また、自主企画展である伊能忠敬展において、図録の売上が目標を大きく上回ったこと、ミュージアムグッズも完売となったことは、当企画に対する市民の関心が非常に大きかったことを意味している。学芸員の方々の日頃の研鑽、努力の結果であろう。

東山魁夷唐招提寺御影堂障壁画展について 映像展示を展示室内から地階講堂に移すなどの工夫で、混雑が回避されたことは観客の安心にも繋がることであり、大きな混乱がなかったことは評価できる。入場者数が目標に届かなかったことは残念であるが、コロナ禍のなかで89.0を超える満足度を出せたことは大きな成果だと考えられる。当館の構造、展示スペースから、唐招提寺御影堂の壁面配置をそのまま復元することは不可能であったと思う。より近い距離からの鑑賞が可能となり満足した入場者が多くいた一方で、本来の唐招提寺御影堂での拝観順序と異なる部分があったことは、鑑賞を楽しみに来館した入場者にとっては失望に繋がったであろう。物理的限界という問題は致し方ないが、何か方策があればと思う。

大英博物館展について 予約優先制が導入されたことは、むしろ安心に繋がったのではないかと思う。各展示室内の滞留数の上限設定や、運営スタッフとの連携で「安心して鑑賞できる環境づくり」をつくれたことは、感染拡大が懸念されるなか、評価に値する。記念講演会の定員については、350人を超える応募があったが、せっかくの機会に多くの人たちに参加してもらえなかったことは非常に残念であった。今後は、オンライン開催などができるように対応を望みたい。収入減や予算の問題もあり、ネット環境の整備、数々のシステム導入費や運営スタッフの増員費用などについては厳しい面もあるが、他館の成功例なども参考にしつつ、前向きに検討して頂きたいと思う。

とくにSNSに関しては、展覧会の案内、コレクション展示、イベントの告知、夜間開館、休館日など必要な情報をタイムリーに投稿し、情報開示を行ったことは大変評価できる。Instagramについても大変訴求力があるので、アカウントが開設できたこと、FacebookやTwitter が活用されていることなども、広く適切に、また迅速に新しい情報を伝えるという面で、大変望ましいと思う。アンケートに実施により、展示や運営にフィードバックすることができたこと、アンケートの回収率が増加したことは非常に評価できる。エクセルフォーマットでは、来場者の特性、年齢、傾向など多様な分析ができるので有益なデータ管理ができると思う。これまで蓄積してきた過去のデータベースも合わせて、細かな分析ができれば、企画展の立案や展示方法に関して、有益なデータとなろう。

ミュージアムショップ 伊能忠敬展にちなんだグッズ(三角スケール)が完売したことは、そのアイデアの卓越性もあり注目に値する。今やミュージアムショップは鑑賞のあとの大きな楽しみでもあると考えられるので、月並みな商品ではなく作品・作者にちなんだユニークなグッズの開発も求められよう。

「常設展」は、特別展の来場者をコレクション展示室に誘導するための大きな工夫を期待したい。魅力的なコレクション展示が行われているのに、勿体ないと感じる。「特別展」は、コロナ禍にもかかわらず、海外巡回展を含む3つの大きな展覧会を実施し、また新たにオンラインシンポジウムを企画するなどコロナ禍における今後の施策につながる事業を工夫されており評価できる。「企画展」は、担当学芸員の関知しない所で、急遽外部からの持ち込み企画が決定するというあり方は大きな問題であるので、従来の学芸員による企画展立案・実施の手順が遵守されるようにしてほしい。

常設展では、神戸の歴史、コレクション展示共に工夫を凝らして実施されている。

特別展については、東山魁夷展が一時中断されたものの、予定してた特別展3本を実施し、さらにアンケートの満足度が目標を大いに上回る水準に達している点が評価できる。また、オンライン講座を開催するなど、ウィズコロナ期における新たな取り組みを実施している点が高く評価できる。特別利用については、DXの取り組みが順調に進んでおり、評価できる。広報については、Instagramを開設するなど、SNSを用いた新たな取り組みがなされており、大いに評価できる。SNSでの発信については、博物館の職員が全て対応するのは業務の負担が過重であると思うので、適宜、市の広報担当部署や、一般のインフルエンサーの方に協力を仰ぐことなどを検討していただければどうか。

人々とともに歩む

自己評価詳細

新型コロナウイルス感染症対策がとられるなかで、工夫をこらしながら各種普及事業に取り組んだ姿勢は評価してよいだろう。

その一方で定員を削減しながらの実施については回数を工夫するなどの対処方法を考慮すべきであった。来年度以降についてはこの点に検討を加えながら、日常に戻していくような取り組みも検討課題である。

学校来館については旧に復していないが、連携授業は例年どおり取り組まれており、非常に有意義な活動となっている。欲を言えば、新学習指導要領に則したプログラムへの改良、オンラインによるオリエンテーションの取り組みも必要であろう。

外部評価委員コメント

普及事業

・実施内容や対象者が多岐にわたり、普及という目標に対する取り組みとして評価できます。

博学連携(小学校)

・コロナ禍においても対策を工夫を行いながら、実施されたこと、授業内容も子どもの実態に合わせたものに年々、改善され評価できます。

新型コロナウイルス感染症の対策のため、様々な工夫を行いながらの取り組みは評価できる。今回は、オンラインをうまく活用し、ハイブリッドで実施していくのも1つの方法ではないだろうか。

【普及事業】コロナ禍で行動・活動に多くの制限・制約があるなか、感染拡大防止のための適切な対策を講じて、一般向け・子ども向け普及事業を開催され課題と目標を達成されたことは高く評価します。応募者多数のため抽選で参加できなかった方も、コロナ禍の開催であり規模の縮小や人数制限などは、理解されていると思います。感染症防止対策を十分に行っただうえ、安全に各事業を開催することが大切であると思います。

【博学連携】

○ 連携授業:コロナ禍での連携授業は、学校との緊密な連携が必要であり、大変ご苦労されたことと思います。感染症対策を施して創意工夫があつての課題と目標の達成であり高く評価します。

○ 大学との連携:緊急事態宣言発令中の講義を、Zoomによるオンライン講義に変更し対応したことは評価できます。

○ 博物館実習:実習生の応募が多く感染症対策もあり、ご苦労が多かったことと思います。実習課題で実習生はもとより学芸員の皆さんも大きな学びとなったことは評価できます。

コロナ禍において学校が校外へ出ることができない時に、出前授業で本物に触れる機会があることは大変有難いことだった。自己評価の欄に書いてある通り、学校にも周知されているので、今後もできるだけ対応してもらえる体制を作ってもらいたい。そして子ども達が「次は博物館へ行ってみよう」という動機につなげてもらいたい。

「普及事業」コロナ禍において、まだ防止対策をしながらの状況の中、安心安全な遊び場を探している方は多いと思う。1度の体験講座をきっかけに、地域の子供達が、何度も訪れる気軽な空間となれば、より博物館としての認知度も広がる良い流れを作る事が可能である。

また年齢層の高い方は、近年文化センターや市民講座の減少により、学習意欲のある方ほど、行き場を失っている事も耳にする。ぜひ、幅広い方へのアプローチを期待したい。

子供向け講座においてオンライン申し込みで参加者が増加したことは評価される。若い親向けの発信力強化は今後必要である。

外部評価コメントつづき

新型コロナウイルス感染症拡大の防止策を行ったことで、感染の発生やリスクを生じさせることなく、安全に各事業を開催することができたことは大いに評価できる。とくにミュージアム講座において、館内ではなく、館外に別途会場を設けたことで、オープンエアーのなか、より安全な環境で学芸員の方の研究成果を発信することができたことは良かったと思う。「学芸員と神戸を巡る」においても、安全面での十分な配慮が伺える。館内活動ではなく、バスで神戸のまちを巡ったことで、実際に歴史を感じ取り、史跡の魅力を知る機会にもなったと思う。こうした参加者の方々の経験が、当館における企画展・特別展などの観客数動員数に結びつくことを期待したい。

「博学連携」は、連携授業を143回も実施されたことや、博物館実習を工夫して実施されたことが高く評価できる。博物館実習に、阪神・淡路大震災における被災状況の講義を加えられたことは、貴館にしかできない殊に有意義な活動であると考えます。

新型コロナウイルス感染症の影響が残る中、各種普及事業に工夫を凝らして取り組んでいる点が高く評価できる。特に、博学連携事業については、緊急事態宣言や学校閉鎖、学級閉鎖などの影響を受けつつも、学校側と調整を重ねられ、100回以上の授業を実施し、ウィズコロナ期における学びの継続に尽力されたことは素晴らしいと思う。盲学校や特別支援学校において、児童・生徒の状態に合わせた学習内容を提供したことも評価できる。博学連携や普及事業は、特に次世代に対する文化資本の継承として意義のあることであると思うので、今後も継続して拡充していただきたい。

「学芸員と神戸を巡る」は大人気で競争率10倍超えのようですし、ほかにも高い競争率の企画があったようです。バスの確保など予算的なことが問題にはなるでしょうが、博物館外に出かけていく企画は、市民にとっては「神戸新発見」という魅力的な企画です。いろいろ大変だとは思いますが、企画数、参加者数を増やせる工夫をしていただきたいと思います。学生に阪神淡路大震災のことを語り継ぐことは重要なことで、ぜひ、継続的に続けていっていただきたいと思います。また、神戸市博は震災の被害を受けたこともありますので、毎年とは言いませんが、自然災害を切り口にした展示や講座などに盛り込むことがあってもいいのかもしれない。

コロナ禍において諸活動が必然的に停滞する中でも、学校での連携授業を積極的に行い、市域の多数の学童・生徒の学びの機会を作り、学校教育と社会教育の連携を多数図ったことは、博物館の必要性を自ら明確にするものであり、その意義は特筆すべきものである。心より敬意を表す。

- ・自己評価にもあるとおり、コロナ禍の中、よく対応されていたと思う。
- ・オンラインの活用(特に学校)については今後の課題。
- ・市内(もしくは県内)の美術館や博物館と共同で企画展のようなものはできないか?例えば「神戸」とか「明治時代」とか、大きなテーマを設定し、各館がテーマにそった展示を行うようなもの。それぞれの館をめぐり、人の回遊にも繋がると思う。

やさしさと安心の確保

自己評価詳細

求められる役割は、果たせたと考えられるが、大きな改善等には結びついたとまでは言えない。予算確保は困難であるため、日々業務の中で来館者の目線に立ったサービスの提供や環境の維持・改善に結びつくよう、できることから着実に進めていく必要がある。

外部評価委員コメント

限られた予算の中で、様々な工夫をこらしながら実施できたことは評価できる。特にWi-Fi環境を整備したことで、今後、新たな様々なサービスが期待できる。

[高尾委員]

すべて丁寧に評価されてい良かったと思います。

コロナ禍であって予約あり、予約なしの入場者に対し不公平感のない対応が大変良かったと思います。

【施設管理】博物館は旧横浜正金銀行時代の建築物であり、格調のある外観と内装は長年多くの市民に親しまれたものであります。神戸市民が愛し・誇りとする博物館の歴史的な価値を後世に継承するため、必要な予算を確保いただき計画的な点検・更新をしていただきたいと思います。

【インフォメーション、ショップ・カフェ】来館者に接することが大切な役割のインフォメーションスタッフ、コロナ禍であり不安を抱えての来館者に、笑顔でやさしい対応は、親しみと安心を感じました。鑑賞後の充実感・満足感を感じるのが、ミュージアムショップとカフェであると思います。来館者と博物館を結ぶ大切な「人」と「場所」であり「時間」です。コロナ禍で窮屈な日常生活、これからも心の豊かさを感じられる魅力ある施設づくりをお願いします。

来館者の中には普段あまり美術館へ来ない人も多いかと思う。そんな人が感じることに今後のあり方を検討するヒントがあるのではないか。

アンケート用紙(もしくはQRコードweb回答)などで声を集めてみるのもいいのではないか。

視覚障がいのある人が来館された際にどのような対応になるのか聞いてみたいです。

ミュージアムショップカフェがにぎわっており、単体でも訪れたいというニーズが増える事は、日頃博物館を知らない、新しい客層へのアプローチになると思う。ぜひ、それぞれ個別のアピールだけでなく、館内スタッフや施設との連携をとりながら、一体感を持った盛り上がりを見てみたい。

施設老朽化にともなう改善については、景気や税収の動向にも左右されるであろうが、継続的に要望をあげる必要がある。

カフェにおいて、神戸牛、神戸ポーク、地元産野菜など地産地消を積極的に取り入れたことは評価できる。展示内容とのリンクやヘルシー志向にもマッチした独創的なメニュー作りを期待したい。カフェ、ショップで神戸の観光情報・関係機関情報が分かれば来館者にとって大きなメリットになる。各社の観光イベントへの参加や新商品の開発・販売を通して、博物館の魅力をより発信できればと考える。

展示・鑑賞は勿論重要であり博物館の核であるが、街の「知の中核」として、芸術鑑賞、芸術の発信、つながり、情報共有、食の愉しみなど、さまざまな役割を担っているのが、今日の博物館ではないだろうか。来館者の体調不良や突発的なけが等の対応に関しては、日頃からの訓練が必要であると思う。スタッフ間の連携で、本人への体調確認や同伴者等からの情報収集、救急車の要請などが円滑に行うことができたことは評価できる。当館には高齢の方も多く来館される。人命にも関わることなので、どのような時でも適切・迅速に対応できるようお願いしたい。

新型コロナウイルス感染症に関しては、長引くコロナ禍により街中には何か油断のような雰囲気も見受けられる。重篤な後遺症などもあり、怖い感染症であることは間違いないので、引き続き、マスクの着用、検温、手指の消毒への協力を来館者をお願いし、対策の徹底を図って頂きたい。事務室等においても、アルコール消毒液の設置、インフォメーションに接客用アクリル板設置、場合によってはマスク着用に加えてフェイスシールド併用など、来館者、職員・スタッフの方々、当館すべての関係者の安全の確保に努めて頂きたい。

阪神・淡路大震災から27年が経過し、当館職員の方々の大半が当時の経験を持たない職員構成となっているなか、大震災の恐ろしさを想像することは難しいかもしれないが、館内連絡会、震災を経験したスタッフ、ボランティアの方々を通じて、当時の神戸の状況、人々の経験を知り、語り合い、伝えていくことは、重要な課題であると考えてる。震災の記憶が薄れゆくなか、「知の拠点」として、大震災という悲惨な記憶の風化を押しとどめることも、神戸の歴史を語るうえで、当博物館の大きな役割ではないかと思う。

外部評価コメントつづき

施設の老朽化への対応については予算の制約があり、修繕・改修が難しいということであるが、博物館建物自体が文化財と言えると思うので、必要な予算措置がなされることが不可欠である
と考える。建物の修繕・改修というハード面でのメンテナンスには課題がみられるものの、インフォメーション、ミュージアムショップ、カフェ、また警備・清掃、緊急時対応などのソフト面でのサー
ビスの提供や改善に不断に取り組んでいる点は大いに評価できる。

建物の老朽化が進んでいるとのことですが、閉館を伴う大規模改修などの予定があるのかが気になりました。
カフェのメニューやショップのグッズは博物館のもう一つの大きな魅力の部分だと思います、新たなメニューなどの開発は積極的に進めていただきたいと思います。

緊急対応における大規模災害への対応策について、神戸市博の阪神淡路大震災の被災経験と対応は、東日本大震災を経て、なお一層重要な歴史的経験として位置づけられ、日本の博
物館行政・文化財行政の上で強く意識されている状況にある。ぜひ、博物館としてそれらの歴史遺産を残し、継承し、記憶を共有化することについて努められたい。それこそが、地域におけ
る博物館の役割といえる。

特に問題なく運営されていると思う。